

著者

白杵 陽さん  
うすき あまき

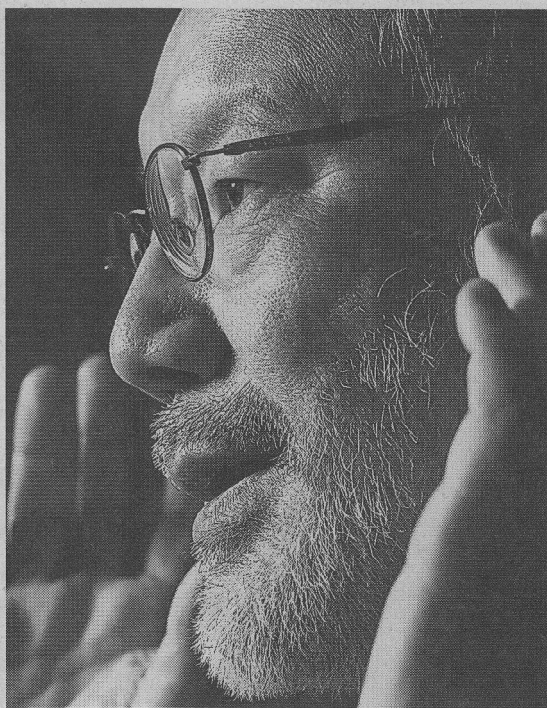
大川周明 (1886~1957)

(7)といえ、大東亜共栄圏を唱導した国家主義者という印象が強い。東京裁判の被告席で東条英機元首相の頭をたたいたエピソードも有名だ。だが一方で、日本のイスラム研究史を語るのに欠かせない人物でもあった。この「もう一つの顔」を現代の専門家の目から浮き彫りにした。

大川のイスラム研究は東京帝国大学の学生時代に

さかのぼり、戦後は自ら「コーラン」を翻訳した。ところが没後これを評価したのは、『回教概論』(42年)を「名著として絶賛した」中国文学者の竹内好だけだった。

「『回教概論』が大東亜共栄圏を理論的に支えるための著作と見なされてきたからでしょ



## 意外なイスラム研究者の顔

う。でも内容を吟味してみると全く違う。現状分析などではなく、最盛期のイスラムについての原理論を書いたものでした」

合理主義者で、西欧の先端的な研究を踏まえていたことなど、意外な側面が次々と明らか

にされる。20年代に早くもパレ

スチナ問題に注目するなど、驚くべき先駆性もある。「大川がヨーロッパ植民史の研究を通じて、グローバルな視点を獲得していたからだと思えます」

ただし英独仏の文献に依拠し

たために、「欧米を批判したに

もかかわらず、方法論的には欧米の影響下にあった」。そうした矛盾を抱えた大川を「日本的オリエンタリスト」と呼ぶ。

「20年代までの大川は、イスラムにおける政治と宗教の融合に、天皇制国家の理想を見えました。しかし、モデルとしたオスマン帝国が第一次世界大戦で崩壊した後はイスラム研究を中断しています」

イスラムに対する今の日本の関心が常に一過性のものに終わり、知の集積が進まない状況も指摘している。

「明治以来の脱亜入欧的な発想のうえに、米軍

占領を経て戦後は外交上もアジアの比重が低下しました。その極にあるのがイスラムです。戦前はアジアとの連帯を右翼が担ったことも含め、考えるべき課題です」

文・大井浩一  
写真・森田剛史